（第三種郵便物認可）　第30242号　夕刊

酪農研修所の生徒たち　みんな希望にもえた明るい顔つきだった

讀賣新聞　昭和36年1月8日（日曜日）

ウシにカケる未来

盛岡からバスで四時間

盛岡駅から約四時間、国鉄バスにゆられて、ようやく岩手県岩手郡葛巻町にたどりつく。

町の平均高度は海抜五百㍍。四百三十三・八七平方㌔に約一万八千六百人の人口がバラバラとふりまかれているにすぎない。一平方㌔当たりの人口は三十八人。町といっても、実際は一村にだ。そして駅のある町へは、幅六㍍の県道一本がたよりなげに延びている。

一昨年の冬のこと。大雪が駅への県道を埋め、町の最北端の部落ではたった三日間で手持ちの食糧がつき、餓死寸前に追い込まれた。

◇

この町のプロフィルのいくつかを紹介しよう。

町の中心に隣日、夜だけ開場する映画館が一軒ある。山のおばあさんがニギリ飯を背負って映画見物にやってきた。そして近くの町かどに立っていた値に聞いた。

「南部しゅ（愛）」といわれる岩手のオドやオバたちのヒタイに刻まれたシワのなんと深く、太いことか。長い間この人たちは、まったく調味料を欠いた一わんのミソ汁とヒエ飯をたべてきた。そこから無気力と貧困が生まれ、それらが歯車のようにこの〝ものいわぬ農民〟のまわりを締めつけてきた。だが―ようやく、この人たちにも〝未来〟がはじまろうとしている。千旨の山々が、まるでビョウブを立てまわしたようにつらなる日本のチベットの未来とは―。部落全員ぐるみの酪農化だった。（文・松崎昭一、カメラ・三石英昭）

サンデー・トピック

「長耳国漂流記(80)」など買いて丸屋帰りて夜、「東北の民俗(100)」「東北の説話(100)」「Chto takoe Sintoo ?(50)」「薬名字典」(100)と買へば300としてくれし。白話字国史1(20)」見つけて買い、帰宅16.00。夜後より姉より電話かかり（PP佐々木にて数男に電話かけし）「日曜杉田宅にてparty せるゆえ依るつれて来よ」と語せしあと、依るにいへば「日直」と。悠紀子21.30ごろ帰来。

1月7日　快晴。賀状の返事17枚。他に7枚。朝よりすがる氏の電話2回あり、8日(日)13.00新宿ヤ田宅にて寿一と待合せ宮崎龍介氏を訪ねることとなる。夜尾上教授より電話「問題受取りし」と。悠紀子、田中修より電話せしに応答なしと。のちほど「かけ直すもせず」と言る。

8日(日)　またすがる氏より電話かかり、「15.30新宿駅で」と。宮崎家の都合により変更と。母病れてあるとのことに悠紀子出てゆく。年賀状の転送賀状44枚。他に18枚（返事なし13枚）山田宅により「立原の愛護者なりて」と。14.30出て新宿に寿一待ち目白の宮崎龍介・白蓮邸へとゆく。白蓮女史「浪華の人」を知りしらずみなりし。龍介氏3度中国へゆき歓待されしと。月餅と「まだ白」とかぞえて出、池袋で夕食、「寺島吉八郎翁本年逝去」と。新宿で別れ車中眠りて下車「わが小説作法(100)」また買う。

9日　雨。どこへも出ず、㊍もなし。

10日　雨。賀状の返事3枚。他に4枚。午後出て松崎医院。ついで成城大学へゆきしも無人。阪本泉氏と家屋氏の賀状受取り、定期券の証明もらい、けさ電話かけ来し板橋生に電話して「あす午前中来よ」といい、立教大学教務課に「もはや南講」ときいてのち bus にて渋谷。母に会い千草のことかまうなといい、父にも会いしのち、大学へ出して「大学僧で」とかいわしやいやく。（金指文雄氏のこの間会いしとて伝言の名刺もらいし）。おでられ礼いえ「Colombin」にて喫茶して帰宅、眠し。筑摩の井上氏より電話あり「明日来」といいし由。

11日　悠紀子渋谷へゆく。賀状12枚。11.00筑摩の井上氏より「月末までに書け」と。そのあと妻相もらて板橋生来る。麻美に会いしと。そのあと手伝いのトリスイーのときき、出て寺尾見せし（雪谷にあり）てのち立教大学。平塚、金子生つれ、30分ほどして手塚教授に会

酪農ひとすじで
"所得倍増"以上へ
日本のチベット・葛巻町

ソリで牛乳を運ぶ江刈のこどもたち―「この雪がみんな牛乳ならなア」と肩をよせ合い話していた

「まんず、きょうは活動写真やってアンすか」―「おはア、活動写真はねえんすドモ、映画ならやってアンす」―「活動でなければオラいやんだ。帰るベシ、帰るベシ」

◇

「ぼくが実際扱った患者だが、畑のまんなかで、立ったままポトンと赤ん坊を生み落とした若い嫁さんがいた。〝落っこちた赤ん坊のヒタイが石に当たって切れ、三針ほど縫ったんだ。赤ん坊はもう一年坊主くらいだろうが、出産のときまで働かなければならない土地柄なんだよ」と町立病院山田慶助院長さん。

◇

「八回嫁入りした娘を知ってます。例の足入れというやつです。その娘に、どうだったと感想を聞いたら〝結構楽しかった〟と答えられましてね…。もう数年前のことだが」―遠藤勘兵衛町長の話。

ヒエが常食 育たぬ乳児

市街地から一歩、山の部落にはいってみる。所得倍増、じょう(縄)文景気といわれるはなやいだ世相にはまったくうらはらな光景がおびただしい。ドライミルクで薄く着色した液体を飲まされている赤ちゃんが多い。米の粉を飲んでいるのは、それこそ〝お大尽〟の赤ちゃんなのだ。

なにしろこの町の総耕地面積二千二百㌶のうち水田は約五分の一の四百㌶にすぎない。だから町の人口の約八〇%を占める一般農家の常食は畑作物、つまりヒエだ。こいつはきわめて消化しにくく、病院のカルテをみたらほとんどが胃腸病だった。

昨年夏、この町で四十二人にのぼる小児マヒの集団発生があり、ありがたくないニュース・フラッシュを浴びた。原因はついにわからなかったが「乳幼児たちのまずしい栄養が大きな原因であることは間違いない」と天井也昌同病院副院長は語っている。乳幼児の死亡率も三十三年度は六十五人を数え、県下第一位だった。

病院の診察風景―「オバ、こどもはなん人かね」―「三人でアンす」―「いや、なん人生んだのかと聞いているんだ」―「まんず、七人生みアンしたドモ、四人死にアンしたス」―ここでは〝分どまり五分〟、五人のこどもがほしかったら十人生まなくてはならないほどなのだ。町の進歩派青年の一人江刈部落開拓農業協同組合事務員の田山昭郎君(三〇)は「残酷物語りはこの土地にいまもふてぶてしく生きている」とクチビルをかんでいた。

さてこの町の農民が残酷物語りの主人公の名を返上しようと、苦しみはじめたのは戦後であった。三十年七月の町村合併まで村制をしいていた旧江刈村の村長中野清児氏(五〇)の話によると、戦前大半の農家は「名子制度」という名のもとで、ひとつかみほどの地主階級に支配される「農ど(奴)」だった。戦後の農地改革によって曲がりなりにも自作農に昇格したこれらの人びとの喜びも、近隣の九戸村、山形村、軽米町にくらべて年間無霜期間が一か月も短く、平均気温は札幌並みの七度というきびしい自然環境の前にガラガラ音をたててくずれていった。

ひ、「和田博士論文会」を和田にいくこととし、野崎生、中川講師には考古学セミナールしていい」
ときいて出、トリスバーにやってつばめ寄 ハイボール1杯つみ(180) 5円借りて出、4銭だらんと安く
(中国考古学の旅(350)」を銀島で買う)。 (坂根生に)

1月12日 定期書を並んで買い、成城大学へ登校、加藤山秀夫の賀状みる(青一へ23日11.00スの教文13日ゼミと和田周ゼに出席の返事出す)。史学研究法「まくやかず」「すみません」とあやまれば和田生笑う。午後、漢文すませ(昨日、中川氏にもしし通り松村氏の結婚会せしと、令嬢結婚せしと)。帰らんとする途にて尾上氏に逢い、講師問題いつもまく。ついで鈴木生に会い海老の礼として文庫与う。今井氏にも会う(新城氏より「紅寺と交通」頼りしと)
鐘田世史帰り来りたり沖縄へ吉田東伍(わが与へし)を置き来しと。Frazer「金枝篇」成城堂に注文し、下北沢にて手紙投函してから、寒がりたら松崎医院。帰れば賀状8枚、おほむね返事なり。出雲生への賀状帰ってきる。夜城平教文より速達「全国的、早稲田と慶応の工科受けるゼミ宿せわせよ」と也。信濃組合の会として22.30帰宅。

13日 賀状9枚。他に金子音彦生より「三彩社に就職」と。城平教文の件 佐紀子 遠藤せんに電話して妹の旅館に世話することとせん。すぐ返事かしめ、あて速達。程ヶ谷高校に出講駐屯軍提出「ダルハイについて」「鄭成功について」とのこと。早くすませ本多生さもと「ケマルアタチュルク」を卒論のthemaとすることに賛成。喫茶店へつれやきてから、宮益坂「Daily Express World Atlas(170)」「The Background of Asia(130)」「Buddhism in Pakistan(200)」買い、ついで「英独ハイネ特集(120)」買いして寒がりつ、帰宅。明日出発との依頼ありし江刈女へ「頑張れ」の手紙出す。

14日 6.40起きん、7.45家を出て、9.00少し前に成城大学いく。四ヤ氏と大氏と、すぐ漢文。その後年中行事のprint圧縮作り、筑摩の井上氏に電話すれば「未出勤」と。12.00四ヤ氏と出て下北沢でラーメンと食い、「熱帯柳の糧子(140)」「正倉院(250)」「澎湃風土記(70)」買ってから、筑摩へいく。お茶かごちそう。他の人たちの圧縮をせてもらい東博氏に会ってから、国鉄にて渋谷。大宅へやれば学生たち来ず。やがて信紀子の帰ってきしあと陽生まる。われ17.30出る。依頼ける夜行にて大阪へとやく。西村美那子より「勤めやめる」と。太田陽子より「圧縮かけ」と。けん田氏にさけば「東良女子大の塩見薫氏病にて10日亡くなりし」と。7日は喉頭癌なりし内田曉郎氏

"農どと"泣かせた乳牛飼育

この土地にホルスタイン種の乳牛が飼育されはじめたのは明治二十年代だったと、馬淵川の水源地馬淵部落の橋権平さん(六三)が記憶の糸をたどってくれた。とうとうたる文明開化の"メーベル・バーグ"に刺激されたわけだが、その限りでは、この土地は酪農のフロンティア地帯である。もちろん経営者は地主階級で、子ウシは名子(農どと)たちへ無理押しに貸しつけられた。

ところが飼料はやせた土地に自生するハギやクズだけだったからいくらホルスタインの見事なオッパイを引っぱってみても乳はほんのすこししか出ない。一歩誤ると子ウシを栄養失調におとしいれ殺さなければならない。雪どけの馬淵川に子ウシの死体がいくつもプカプカ流れているのを、こともたった中野氏は焼きつくような痛みでながめたという。そして子ウシの損害代金は名子の借金になってはね返ってきた。

そんな名子制度のもとで育ってきたいく人かが、馬淵川の右岸の傾斜地を開墾し、肩を寄せ合いながら生活している。若手の大上喜悦さんが重い口をポツリポツリと開いて語った。「オラ二・八㌶の畑を女房と二人でスキとクワもってひらいたンス。一年に四、五十㌧は掘りアンしたかー」

大上さんの開墾地からはコムギ十㌧当たり三俵(約五千円)ダイズ二俵(約五千五百円)ヒエ七百五十㌔(約五千円)がとれ十㌧当たりの収入は七千円弱、支出は月にヒエにまぜてたべる米が三千㌔のほか、しょう油、食用油、砂糖、サカナ、二人のこどもの菓子代などで、ざっと四千円、衣服費なんか月額三百円に押えても十万円の借金を返すことはできない。

部落長の冬沢芳太郎さん宅も「このままだバ、じりじり死ぬのを待つばかりでアンす」と、ヒタイのシワを一層深くした。

全町酪農化へ踏み切る

ではこうしたボーダーラインの底部にあえぐ農民たちを救う手だてはないのか。遠藤町長と中野氏は口をそろえて「たった一つ、この土地に"新しい酪農の歴史"をつくることだ」といい切る。

戦前に続いて現在も乳牛飼育が農家の間で行なわれてはいる。大上さんの家にも二頭、冬沢さんのところにも二頭のホルスタインが、家族以上の待遇をうけながら干し草をはんでいた。町全体では県内乳牛のほぼ一割に当たる二千四百頭もの乳牛がいる。しかし飼料といえば相かわらずハギやクズだ。だから冬沢さんの乳牛は一日七・二㌔㌘しか乳を出さない。並みのホルスタインの半分だ。また酪農協同組合の組織はあるが、実体は各戸てんでの零細経営。乳価バニックがひとたび見舞えばこうした零細酪農は吹き飛んでしまう。

全国初の町立酪農学校

この数字を満足させるため、町では三十五年度から牧草のタネ購入の半額補助を開始した。また南部の曲がり家一」として有名な住まいと畜舎をL字に組み合わせた住宅方式も、独立牛舎を建築するよう指導し、この半額補助へも踏はたしてバニックは二十九年突然襲来した。借金までして、一頭十五万円前後で購入したホルスタインの価格は八万円に暴落、金利に追われた農民たちは損を承知で乳牛を手放した。この"白いアラシ"を防ぐにはクズやハギが自生している原野をオーチャード、クローバーなど高い栄養価をもった牧草畑に切りかえること、五頭以上の多頭飼育、共同化が必要。

こうした酪農化構想を軸に、昨年度から町政の体質改善がはじまった。議場をもたぬ町議会は小学校の教室や旅館でひんぱんに開かれ、激論が戦わされた。しかし反対派も遠藤町長のあげる「数字」の前には"全町酪農化に踏み切らざるを得なかった。

遠藤町長の説明は―これまでヒエをつくっていた畑は全部牧草畑にする。一頭当たり年間最低四千五百㌔㌘(現在平均二千七百㌔㌘)の乳がでる乳牛を十頭飼えば、乳価を一・八㌔・㌘四十円(現在四十二円)で乳業会社に渡したとしても百万円の粗収入が可能である。

月給二万円をめざして

世帯数千戸の上平部落にいま新しい試みが動きつつある。これは遠藤町長がいう"多頭飼育"をもう一歩前進させた"共同酪農"システム。この指導者は中野氏で、その青写真によると部落にいまいる十五頭のホルスタインを百頭にする。そして共同牛舎を建て、各戸から二人ずつ労力を出すとともに、各戸の土地を全部クローバー、牧草増産地として提供する。一頭のウシから年間五千四百㌔・㌘の乳がしぼれるとすると、乳価が一・八㌔・㌘四十円としても年間千二百万円の粗収入があり年間五百万円の黒字は確実。乳牛を購入し、牛舎を建築する約一千万円の設備費金は、乳牛会社、県経済連合会から借り受ける。したがってこうした借金は四、五年ですべて返済できる見通しだし、この間生まれてくる子ウシを売れば一戸当たり二万円の"月給"を払うこともできるという。

ヒエやムギはつくるな

「ことしから畑にはヒエもムギもつくるな、全部牧草畑にしろ」というのが上平部落のスローガンである。一種のコルホーズ化ともみえるが、将来千戸がそれぞれ自立できる見通しが立てば、経営を分散させる構想だ。

農民が命より大切にする畑に、人間が食べられない作物をつくれという、この酪農共同化は農民としての意識をまっ殺してかからなければ完成できないだろう。

十二月はじめ町の真ん中に百八十平方㍍の公民館が完成した。その前を通りかかったら、小学生たちが美しい二部合唱をやっていた。この町で生まれたという「南部ウシ追いうた」だった。へいなかなれども南部の国はず、西も東も黄金(かね)の山…。この土地に住む農民をしいたげたけわしい山なみも、かつては砂金の産地だった。その砂金を背負って無数のウシのむれが山を下っていった。"未来の砂金"は白い白いウシの乳なのである。

Heine 13ed.

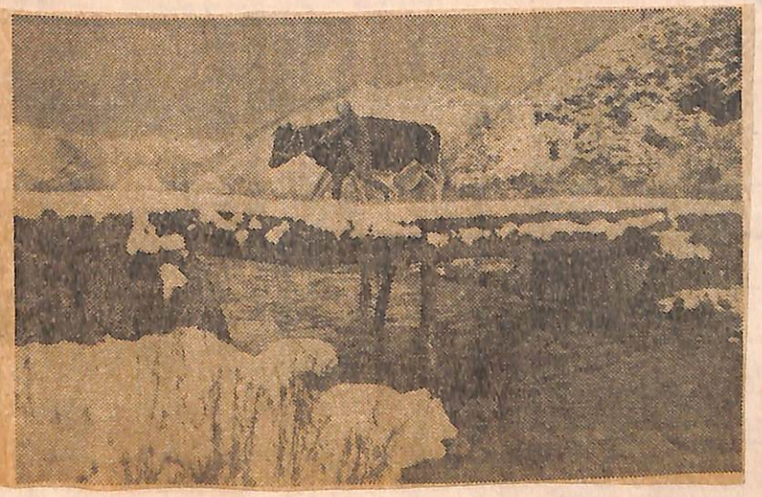
暮すなりしと也。夕波会の宴に参加して帰って来る。

1月15日(日) 里井博子より「柳橋ヨ氏に母方の祖母」と。10.00 修理の為dr.へ行き大へとの事。と帰書もらかへる。"賀状の抽籤"より、4等に井上順子夫人、5等に坂口兄弟、青山定雄、田中名雄、野上弘、柏原美佐子、西岡照子、長沖一、新城常三、響庭源吾氏の賀状等とあり。午後電話かけ吉成・杉田の2生宅相1箱もらって来る。ケセ庄達にて角川より「Heine の13版の印紙1500枚に検印せよ」と。

16日 聴音して成城大学へ休みの電話かけさせ、伊藤信吉氏のお礼状。堀内敬三より手紙。「自叙伝」と遠慮しないで書せと也。望野芳子より歌2首。也に氏、角川書店「なぞ」4冊の紹介。夜、史より電話「近日予算で帰れず」と。この日地震あり。

17日 寒し。小田急御宴の為不直と。10.00出て杉崎医院へ寄って成城大学。丸山後ヨ体みとり(角川の朝比奈嬢に電話し、図説世界文化史大系の16巻をいただけば「ありがたし」と「明後日とりに行く」といわ)。すみてアメリカ史やるといふ杉島生此方しいもかず「英語でもぜひ氏倍家、考古学いせやあ」と。そのあと文化史の会で大隅教授「もつづきを任かるべし」と、今井氏も賛成と。幸外なり! 年内行事の会に出て21.00帰宅。坪井より22日より2月5日まで滞在と。白鳥夫人(令嬢服部夫人と会へ)と。増田書店、西村氏晴之男の電話。角川より10.500-1575-1888(電上)=7.037ましと。Heine の12版にて54円也と。

18日 晴。9.00出て東大前、西川英夫に電話して坪井の上京のことにて、研究室にて和田先生年末挨拶かりしとそく。三上氏の代りに後藤君事務録を上れ。三上氏12.00前来り、学術研究費申請の相談をすみて坪井へ速達し、白十字でlunch食ってから西川家へ行き夫人に1年おくれ会わ、家改築しつつあり。それより bus にて大塚、研究所にすぐ行けば他出、まもなくして地震。しばらくして大塚出。手塚教授に会へば



馬淵川にかかる土橋の上をホルスタインが通る。自然にしいたげられた人々が乳牛によせる期待は大きい